

地盤調査委託特記事項

1 特記事項の適用

本地盤調査委託特記事項（以下「特記事項」という。）で、□印及び■印の付いた項目については、■印の付いた項目を適用する。また、特記事項に記載されていない事項は、「地盤調査委託仕様書」（以下「仕様書」という。）による。

2 委託概要

件名	練馬区立土支田農業公園改修基本設計		地盤調査
施行場所	東京都練馬区土支田三丁目 34 番 26 号		
調査期間	14 日間、令和 8 年 12 月 18 日まで		
建設予定	構造規模	木 造	
建物概要	地上	1 階、	地下 階
	延床面積	90 m ²	
	基礎形式	ベタ基礎	
調査概要	■ ボーリング ■ 土質試験 □ 原位置試験 ■ その他調査（平板載荷試験）		

3 調査の種類及び箇所数等

(＊．＊．＊) は仕様書の該当項目の番号を示す

(2. 2. 1) ■ ボーリング

種 別	深 さ	本 数
☐ ボーリング A (孔径 66 mm)		
☒ ボーリング B (孔径 86 mm)	15	1
☐ ボーリング C (孔径 116 mm)		
☐ ボーリング D (孔径 66 mm)		
☐ ボーリング E (孔径 86 mm)		
☐ ボーリング F (孔径 116 mm)		

位 置 : 調査位置 図による。

(2. 2. 4) ■ 試錐機はロータリー型試錐機を使用し、ビットは削孔する土質によって適当なものを用いる。 ■ 方法等は次による。

- ・ 削孔は垂直に行わなければならない。
- ・ 掘進中は、掘進速度、手ごたえ、ポンプ圧力計、湧水量および及び排水量、排水色、スライムの状態、貝がらや腐植物などの混入物などに絶えず注意し、これらの変化を深度ごとに記録する。
- ・ 特に薄層などについては見落とすことのないように注意しなければならない。
- ・ 未固結堆積物のボーリングにおいては、以下に注意して作業を行うものとする。
 - ア. 孔口は、原則としてドライブパイプをたて込むものとする。
 - イ. 掘進に当たっては泥水を使用するものとする。
 - ただし地下水位までは原則として泥水を使用してはならない。
 - ウ. 孔内の水位は、その日の作業開始前に必ず観測すること。
 - エ. 崩壊性の地層で孔壁を泥水によって保護できない場合にはケーシングパイプで保護する。
 - この場合ケーシングパイプの挿入は慎重に行い、掘進深度をこえて挿入するようなことがあってはならない。
 - オ. 乱さない試料を採取する深度では、試料採取に先立ち、孔底を適切な方法で清掃し、スライムが残らないように注意しなければならない。
 - カ. 孔径が大きくスライムの排除が困難な場合又は著しく多量のスライムが出るときは、セジメントチューブまたはマッドチューブを使用するなどして孔底のスライムを排除する。
- ・ 岩盤及びこれに準ずるボーリングでコア採取を直接の目的とする場合には、以下に注意して作業を行うものとする。
 - ア. 常にコアの採取率を最高に保つように努める。
 - イ. コアチューブは、原則としてダブルコアチューブを使用する。

(2. 4. 1) ■ サウンディング

■ 標準貫入試験

ボーリングの種別による

(2. 4. 3)

■ 標準貫入試験は次による。

- ・軟弱地層で自重沈下する場合あるいは打撃による貫入量が 40 cm を越える場合は 40 cm で中止する。
 - ・シンウォールサンプルを採取する部分は、標準貫入試験による影響をうけない様に試験間隔に注意する。
 - ・標準貫入試験用サンプラーで得た試料はスライムの有無、採取長さを確認して土質名、色調、状態などを観察し、混入物、有機成分、特異な鉱物などについて記録した後、保存用または試験用試料にとり分ける。
- なお、保存用試料はボーリング孔番号、採取深度順に整理して標本ビンに密封保存する。保存用試料の一部は標本試料とし、その他は検査終了後廃棄するものとする。
- また、試験用試料は含水比などが変化しないようにビニール袋などに密封し、速やかに土質試験室へ搬入する。

(2. 5. 2)

■ サンプリング

(2. 5. 3)

試料採取は次により、採取位置は

調査位置

図による。

(2. 5. 4)

■ 乱さない試料の採取

■ ア. 固定ピストン式シンウォールサンプラー

☐ イ. ロータリー式二重管サンプラー

☐ ウ. ロータリー式三重管サンプラー

深さ	地層	個数	サンプラー
1～10 m	ローム	1 個	

■ サンプリングチューブの規格及びボーリング孔は次による。

- ・サンプリングチューブの規格は、 $\phi 73 \sim 75$ mm、全長 1,000 mm、採取試料の有効長さ、600～800 mm、肉厚 1.2 mm 以上の真鍮製またはステンレス鋼製のライナーとする。
- ・ボーリングの孔径は、一般にシンウォールサンプラーを使用する場合で $\phi 86$ mm 以上、ロータリー式二重管サンプラー、ロータリー式三重管サンプラーを使用する場合で $\phi 116$ mm とする。

■ 試料の採取に当たっては次の点に注意する。

- ア. 固定ピストン式シンウォールサンプラーの使用に当たってはピストンロッド又はチェーンの固定を完全に行うこと。特に下方への引張りに十分注意する。
 - イ. 採取に先立って孔内のスライムを適切な方法で除去すること。
 - ウ. サンプラーの押し込みは定速度で押し込み、押し込み時には衝撃、振動あるいはねじりなど与えてはならない。
- 押し込み長さは、サンプラーの試料採取有効長さの 90% 以内とする。

■ 試料は 1 箇所につき土質試験に必要な長さ以上採取するものとする。試料が不足するとき必要な長さ以上になるまで連続して採取させる場合もある。

■ 乱さない試料の処置は次による。

- (1) 採取試料は、サンプラーの押込み長さに対する採取長さを記録するほか、試料の上下端にみられる試料で土質名、色調、湿潤状態、混入物などを観察し記録する。
- (2) 採取した試料（粘性土）は両端を長さ 3 cm 程度削り取り、両面を平らに整形し、松ヤニを混合したパラフィンで密封したうえ金属製またはゴム製のキャップをかぶせて、テープで巻き速やかに土質試験室へ搬入する。砂質土の乱さない試料については、運搬時の攪乱防止及び土質試験時の供試体作成を容易にするために現場で凍結させる。ただし、凍結によって品質に悪影響を与えることが予想される場合には、別途監督員と協議して決定する。
- (3) サンプラーには調査件名、ボーリング孔番号、採取番号、採取深度、上、下の別等を記入する。試料は輸送の際に打撃、振動などによって乱れを生じさせないように注意して速やかに 2.7.7 による土質試験室に送り、2.7.2 による各種土質試験を行う。
また試験を行うまでの試料は冷所に保存すること。

(2. 7. 2) ■ 土質試験

仕様書 2.7.2 の次の試験を行う。

■ 土質試験 $\beta 2$

数量： 1 試料

物理試験：・土質試験 α_1

・土の湿潤密度試験 (JIS A 1225)

力学試験：・土の一軸圧縮試験 (JIS A 1216)

・土の三軸圧縮試験 (JGS 0521～0524)

(2. 7. 3) ■ 一軸圧縮試験は、土丹などの硬質な試料又は軟弱で自立しない試料では、採取径のままで行ってもよい。この場合、試験成績書に記載するものとする。

■ 三軸圧縮試験は、非圧密、非排水とする。

■ 締固めた土のコーン指数試験は、JIS A 1228 による。試験は、1 層当たりの突固め回数を 10 回、25 回、55 回、90 回とした 4 個の供試体に対して行う。ただし、供試体の作成に当たり、試料を繰り返し使用してはならない。

(2. 7. 7) 土質試験室は次による。

■ 本調査に必要な JIS による試験器又は(公社)地盤工学会の定める土質試験器を完備する土質試験室

☐ 大学の土質試験室

(3. 1. 2) ■ 平板載荷試験

箇所数： 2 箇所、深さ： 0.5 m
位置： 調査位置 図による。

■ 調査位置の地盤の高さを、ベンチマークを基準とした測量を行い確認する。

☐ 水中に載荷板を設置して試験を行う。

(3. 1. 3) 試験最大荷重： 150 kN

反力装置： 10t 重機

載荷方法： 段階式繰返載荷（8 段階）

- (4. 2. 3) ■ 基礎設計及び施工に関する検討と提案は、次による。
- | | | |
|---|---|---|
| ■ | ア | 支持地盤の検討並びに許容支持力及び沈下量等の算定を行い、考察を加え、適切な基礎形式を提案する。 |
| □ | イ | アに加え、圧密沈下、負の摩擦力及び地盤の液状化等並びに監督員の指示する事項について考察する。 |
| □ | ウ | イに加え、根切り及び排水工事などについて調査結果に基づき技術的考察をする。 |

4 その他

- | | |
|---|---|
| ■ | 本案件は、練馬区設計等委託成績評定要綱(平成 27 年 2 月 17 日付練総経第 1007 号)に基づく設計等委託成績評定の対象である。 |
|---|---|

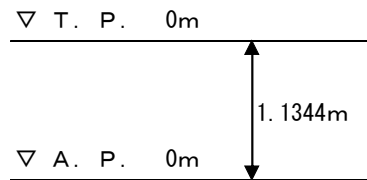
(別表 1) ボーリング種別ごとの想定土質区分延長長さ

種別	φ	土質	単位	延長長さ	備考
A	66	粘性土・シルト	m		
		砂・砂質土	m		
		礫混じり土砂	m		
		玉石混じり土砂	m		
		固結シルト・固結粘土	m		
B	86	粘性土・シルト	m	5 ～ 1 0	
		砂・砂質土	m	5 ～ 1 0	
		礫混じり土砂	m		
		玉石混じり土砂	m		
		固結シルト・固結粘土	m		
C	116	粘性土・シルト	m		
		砂・砂質土	m		
		礫混じり土砂	m		
		玉石混じり土砂	m		
		固結シルト・固結粘土	m		
D	66	粘性土・シルト	m		
		砂・砂質土	m		
		礫混じり土砂	m		
		玉石混じり土砂	m		
		固結シルト・固結粘土	m		
E	86	粘性土・シルト	m		
		砂・砂質土	m		
		礫混じり土砂	m		
		玉石混じり土砂	m		
		固結シルト・固結粘土	m		
F	116	粘性土・シルト	m		
		砂・砂質土	m		
		礫混じり土砂	m		
		玉石混じり土砂	m		
		固結シルト・固結粘土	m		

※起工時削除

標高

(T. P.) と (A. P.) の関係



(備考)

T. P. : 東京湾平均海面 (Tokyo Peil)

A. P. : 霊岸島量水標零位＝荒川工事基準面 (Arakawa Peil)

※ 同じ高さの場合

T. P. 表示の値 < A. P. 表示の値